

パラメディカル・レポート

未婚女性の人工妊娠中絶の実態

小泉 美由紀, 千田 道代, 熊谷 朱美
桜庭 博子, 目黒 順子, 下斗米 玉枝
山岸 律子

近年青少年の性意識の早熟化と共に、人工妊娠中絶（以下中絶と略します）は、若年化現象を示し、特に10代の中絶が増加していると言われている。私達はこの現象の詳細を知る為に、以下の検討を行なった。

昭和52年～57年の過去6年間に、当院で分娩した婦人を対象に、第1子出産前の中絶の実態を、入院、外来病歴より抽出し調査した。尚、昭和53年以降については、先の分娩を当院で行なった既往をもつ経産婦の場合、重複して対象とすること

を避けるために、調査対象から除外した。

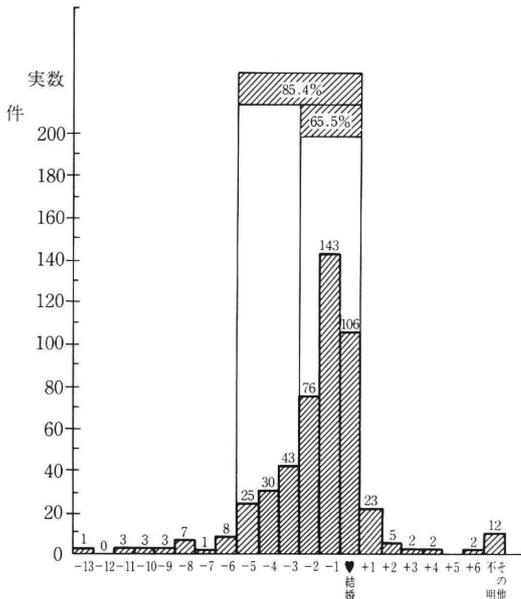
調査結果

対象期間に、先の基準より抽出された対象者数は、3,048名であった。このうち中絶を既往にもつ者は510名で、その頻度は、16.7%であった。

第1子出産前の中絶について、結婚の年からどの位前のものか、あるいは後かということで見ると、表1に示す如く、結婚1年前が最も多く、次いで結婚の年、結婚2年前と続いており、この3年間で65.5%を示した。尚、結婚の年の例は、その殆んどは結婚直前のものであった。結婚の年から結婚5年前までの例で、全体の85.4%を占めた。以上より、第1子出産前の中絶例の多くは、未婚時代に行なわれたものであることが明らかである。

中絶を受けた年齢別に比較すると、表2に示す如く、20歳～24歳までが最も多く、62.9%、次い

表1 人工妊娠中絶例の内訳



仙台市立病院周産部

表2 人工妊娠中絶例の内訳（年齢別）

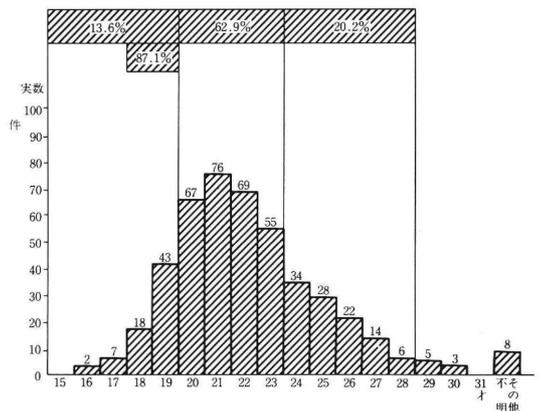


表3. 人工妊娠中絶既往頻度(出生年次別)

出生年	対象者数	中絶既往者数	頻度
昭和12	6名	0名	%
13	3	1	
14	8	1	
15	11	2	
16	18	2	
17	20	3	
18	31	5	
19	47	8	
20	51	8	15.6
21	60	6	10.0
22	143	23	16.0
23	165	19	11.5
24	219	33	15.0
25	240	26	10.8
26	290	51	17.5
27	291	53	18.2
28	292	49	16.7
29	291	53	18.2
30	259	48	18.5
31	229	36	15.7
32	143	30	20.9
33	97	21	21.6
34	68	15	22.0
35	30	7	
36	25	7	
37	6	1	
38	3	1	
39	1	0	
40	1	1	

表4. 人工妊娠中絶既往頻度(出生階級年別)

出生年	対象者数	中絶既往者数	頻度
昭和21~23	368名	48名	13.0%
24~26	749	110	14.6
27~29	874	155	17.7
30~32	631	114	18.0

で25歳~29歳までが20.2%、15歳~19歳までが13.6%と続いている。ここで特に注目されることは、15歳~19歳の若年中絶例のうち、18歳~19歳の占める割合は、87.1%であり、つまり中学、高校時代を終え、社会的制約がゆるむ時期からの増加が著しいことがわかる。

表5 中絶年齢別頻度(出生階級別)

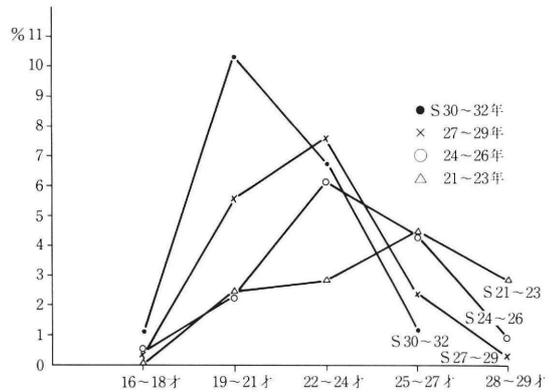
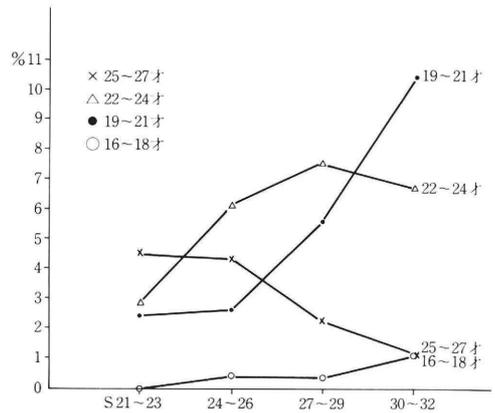


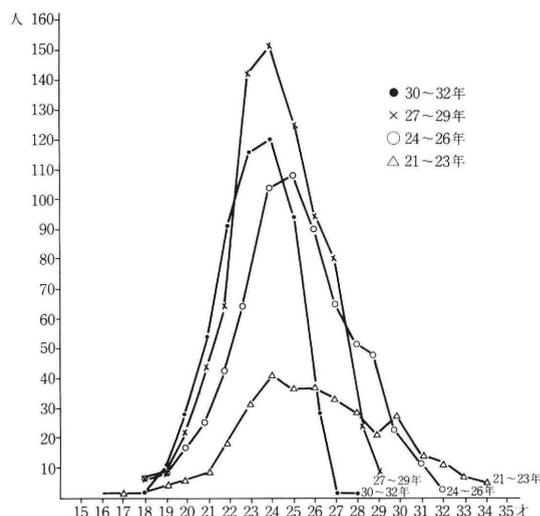
表6 中絶年齢別頻度の推移



次に、中絶既往頻度を、出生年次別に比較してみた。表3に示す如く、対象者は昭和12年生まれから、40年生まれまでで占められていた。対象者が50名を越える昭和20年生まれから、昭和34年生まれまでの頻度を比較しますと、表に見る如く、年々直線的な増加を示しているものではないが、上昇、下降を示しながらも、全体の推移をみますと、出生年が若くなるにつれて中絶頻度は高くなっていく傾向が明らかである。

そこで、出生年を階級年別に3年きざみに区分し、昭和21年生まれから、昭和32年生まれまでの4群について比較してみた。表4に示す如く、出生階級が若くなるにつれて、漸次中絶既往頻度の増加が明らかであり、昭和30~32年生まれでは、昭和21年~23年生まれの約1.4倍と増加してい

表7 結婚年齢分布—出生階級別4群について—



る。

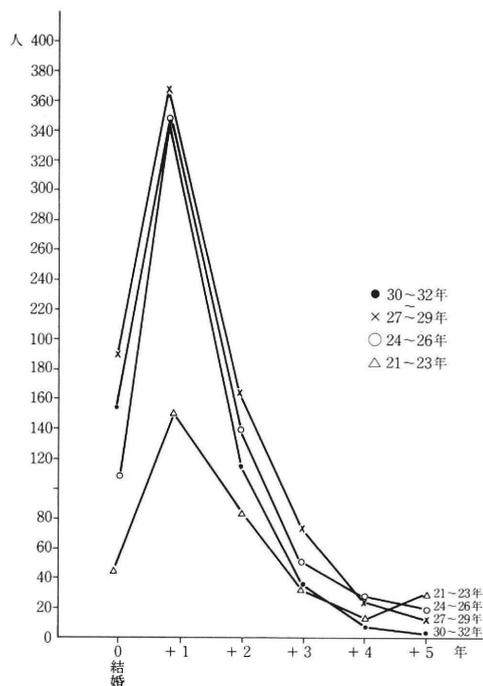
又、4群について、3歳きざみに中絶年齢別頻度を比較した。表5の如く、出生階級年の若い者ほど、ピークが左側に移動しており、その頻度も高く、中絶年齢の若年化現象が明らかである。

中絶年齢別頻度を、出生階級年による推移としてみると、明らかに19歳～21歳の中絶頻度が急増加しているのが注目される。16歳～18歳のものは、ゆるやかな増加傾向を示す一方、22歳～24歳、25歳～27歳のものはむしろ減少傾向にある。

ここで、これらの結果の信頼性を裏付けるために、4群についての結婚年齢分布をみると、表7の如く、その分布状況はほぼ類似しており、結婚年齢の中央値は24歳あるいは25歳にあり、ほぼ一致していた。

又、4群について結婚から第1子出産までの間隔をみると、いずれもその分布状況は類似しており、結婚1年後の出産例が最も多いことがわかる。以上より出産階級年別にみた4群が、ほぼ同質の対象者で占められていると考えて良いと思われる(表8)。

表8 結婚から第1子出産までの間隔—出生階級年別4群について—



考 察

最近の優性保護統計では、若年妊娠中絶の増加傾向を問題化しており、性に関する問題は今や緊急の課題となっている。

今回の結果は、未婚女性の中絶が年々増加してきていることと共に、中絶年齢の若年化現象を改めて裏付けるものとなった。特に19歳～21歳の中絶例、つまり高校卒業後、社会的に制約のゆるむ時期からの中絶例が急増加していることを考えると、現在の性教育の中心課題はおのづと明らかである。

性に関する正しい教育、しつけは高校卒業までの間に終了していることの必要性を改めて痛感させられた。

本文の要旨は、第24回日本母性衛生学会(於札幌)において報告した。

(昭和59年10月2日 受理)